

作者：陳韋聿
(日)
譯者：富田哲

淡水夕照



淡水夕照 1935 キャンバス油彩 91.5×116.5 cm 個人蔵

崎仔頂の高台から海の方をながめている。小さな港町と世界が連結した歴史風景が、陳澄波の眼前の烽火街に沿って広がる。礼拝堂の鐘の音がマカイの布教の物語を伝え、貿易が近代淡水にもたらした繁栄を川べりのふ頭と船が物語る。丘の上の紅毛城が、その過去の記憶と同様、はるか遠くにたたずむ。小さな町のあちこちに歴史が折り重なり、淡水河の夕日を受けてきらきらとかがやいている。

1. 船



かつて淡水港には各種の船が出入りしていた。河口付近の大型汽船は、はるか外洋をめざす。ふ頭あたりの帆船は華南沿岸、あるいは淡水河上流へ向かう船だろうか。ポンポンと音を立てる小型蒸気船は台北の大稻埕と淡水を結ぶ客船である。

2. 灯台



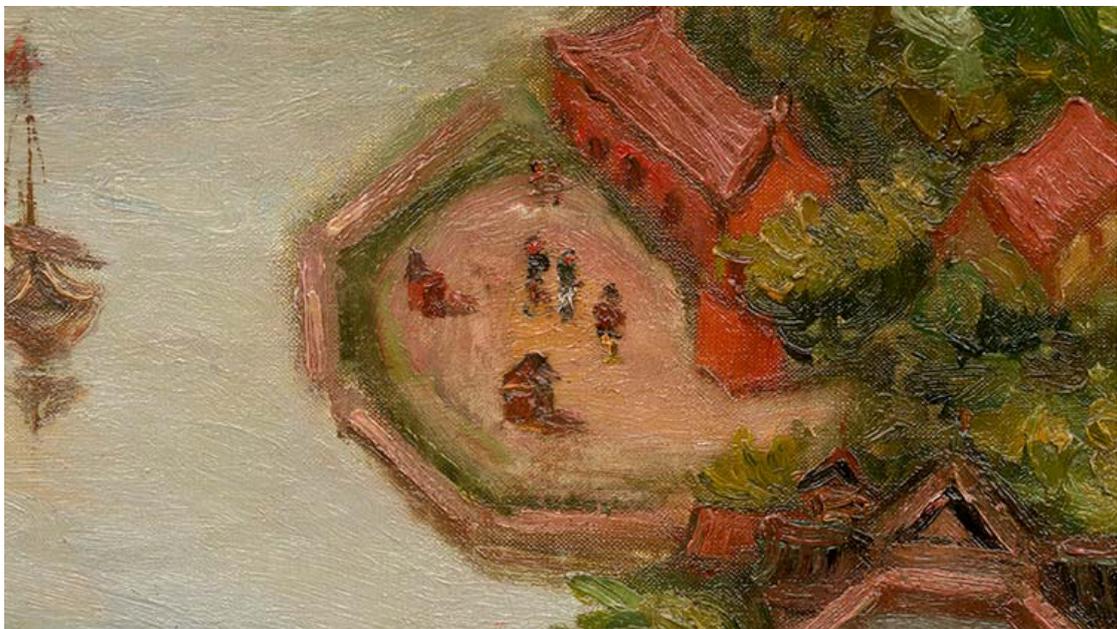
岸边に突き出たまぶしい白光がきらめく灯台は、夜には船を港へと導く。18世紀末、淡水沙崙にはすでに、住民が資金を出し合って作られた「望高楼」が置かれていた。19世紀後期には、外国商船の事故が多発したため、清政府により油車口岸に灯台が設置された。

3. ダグラス洋行



2階建ての洋館と背の低い細長の建物は、その昔ダグラス洋行の職員宿舎と倉庫だったが、日本統治期には徴用され郵便局の単身者用宿舎になっていた。ダグラス洋行はかつて台湾の対外汽船貿易を独占していたが、20世紀初期に日本が政策的に配置した航路との競争に敗れ、台湾での業務は衰退していった。

4. 税関ふ頭



川面に突き出ているのは税関ふ頭で、日本統治初期に作られた。細長い建物は倉庫である。清朝期に對外通商港となった淡水には税関が置かれて西洋船の貨物から関税を徴収し、日本統治期になってもその規模は拡大した。ふ頭付近には船をつなぐ柱や乗船口などが設けられていた。

5. 烽火段



曲がりくねった通りは今日の淡水老街の末端で、古くは烽火段と呼ばれた。清朝期には水師の官兵会館があったところで、開港後には多くの洋行の商人たちがここに集まった。倉庫、ふ頭、事務所などが作られ、各種貨物の輸出入がおこなわれていた。

6. 紅毛城



遠方の丘の上にそびえ、城壁もはっきり見える。となりの赤塀と黒屋根の建物は英国領事館であろう。いずれも、16世紀ヨーロッパ人と台湾の接触や、台湾の開港通商の歴史を体現するものであり、淡水にとって重要な文化財産となっている。

7. 礼拝堂の鐘楼



淡水礼拝堂の時計塔が右側に屹立している。ここにえがかれているステンドグラスは今日にいたるまで変わっていない。時計塔から鐘の音がそこはかたく聞こえ、町の空に響いているようだ。手前には、カナダ長老派教会の宣教師マッケイが開いた偕医館の屋根の煙突窓も見える。いずれの建物も馬借街(マッケイ通り)に現存している。

8. 淡水郡役場



黒いかわらと半切妻の日本式建築は淡水郡役場である。1920年に淡水郡が設置された後に建てられた。日本統治後期の淡水郡の公的行事の多くがここでおこなわれた。中華民国政府来台後に撤去され、現在は新北市警察局淡水分局の所在地となっている。